

論文

## 華人プロテスタント信者の越境的連結

——「中国信徒布道会」をめぐる一考察——

モリ・カイネイ\*

## はじめに

中国に出自を持つ移住者・移動者である「華人」がそれぞれの移動先で生きる場を中国大陸と対比して「華人社会」と呼びたい。「華人」ネットワークは多元的かつ重層的であるが、特に文化関係の繋がりについては、原義として散種という意味をふくむディアスポラ状態が常に前提とされている。華人研究では、中国という発祥の地から海外に持ち出された文化は、ホスト社会と交渉する中で、いかに維持されているか、または変化しているか、ということが研究対象になっている。このような問題意識とは、実質的に「種」に類比できる「中国的要素」や「中華文化」の伝播及び伝承への関心である。即ち、すべての華人および彼らの文化には多少とも「中国性/華人性(Chineseness)」という同質的な部分があると想定されたため、それを基準に構築されたネットワークと「根源」である中国とは、常に「中心と周辺」(中心からの分散)の構造になっているといえる。華人社会の宗教を巡る研究もよく文化研究のサブジャンルとして取り扱われる。しかし、華人社会の宗教が多種多様であり、その中にはルーツが中国本土にまで遡れない、あるいは信仰の内容が漢民族の文化的伝統に依拠しない、「非伝統的」な宗教信仰もある。キリスト信仰はその代表的な一例である。このような「非伝統的」な宗教信仰に基づく繋がりを考察する際、上記の前提の有効性が問われる。一方、近年では、華人が移住先における日常的な実践を基に生み出したローカルな経験の中でもとりわけ、「中国的要素」ではない異質な側面に注目し、さらにそれに基づき、「根源」である中国の相対化または他者化を考える流れも現れてきた。本稿は、このような発想を参考にし、華人プロテスタント信者の宗教的体験と実践をもとにそのネットワークを考察する。

華人社会の伝統宗教のトランスナショナルな展開を巡るこれまでの研究については、仏教系の仏光山や慈濟、民間信仰に由来した新興宗教の徳教などを挙げることができる。プロテスタントの場合、華人社会における受容の歴史は中国大陸よりも長かったにもかかわらず<sup>1</sup>、先行研究の蓄積は少なく、その大半は個別の事例への考察に留まっている。特に信仰の内容や教会組織の働きかけが、華人としてのアイデンティティの再構成またはコミュニティ形成等がいかに影響を与えたか考察することで、「華人基督徒(華人キリスト者)」という信者像を描き出すことに偏重してきた [Constable, 1994; Yang, 1999; Leung, 2002; 朱, 2009]。それらの議論は大抵、中国と西洋を固定された文化として規定したうえで、信者をその2つが接触することで生み出されたものとして取り上げてきた。近代非西洋世界のキリスト教受容をめぐる研究としての「一国キリスト教研究」の場合、それが有効な手法かもしれないが、越境する繋がりである「華人」にも適用できるとは言い難い。

例えば、朱[2009]は20世紀初頭、イギリスの保護国であるサラワク王国に移住した、福州人プロテスタント信者を中心とする集団移民を対象に考察した。その議論は、新儒家思想の「文化中国(Cultural China)」の概念を援用して、中国大陸のキリスト者は同心円構造のモデルの内側に、中国を巡るイメージを西洋世界に紹介する一部の宣教師は外側にいるとすれば、華人信者は中間地帯に位置づけることができると主張した(図1)。このモデルは単純

---

キーワード：華人、プロテスタント、ディアスポラ、ミッション団体、華語圏文学

\*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2009年度入学 共生領域

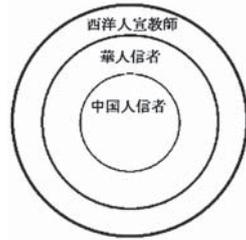


図 1

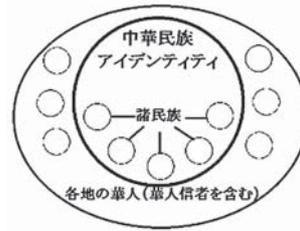


図 2

明快だが、基本的にその原型と同じく、中国側から世界（特に西洋）との接触を見るという自文化中心主義的な認識にすぎない。

一方、プロテスタントが中国に伝来してから今日に至るまで、「キリスト者が一人増えれば中国人は一人減る」という極端な立場をとりながら、しかも信仰以外の要素を強調して中国人または華人がキリスト信仰を受容する動機を疑う考え方がある。それらに対して、Yang[1999]は現代のアメリカにおける華人信者のアイデンティティを検討したうえで、中国社会の伝統的な価値観とプロテスタントの価値観との融合による、アイデンティティの重層化現象を描写した。Yangはその「重層化」についていくつかのパターンを整理しただけだが、方[2008]はそれを変容による華人の「定義範囲の拡大」として受け止め、費孝通の「中華民族多元一体論」とリンクさせた(図2)。近年、この「多元一体」論は中国国内の諸民族を人工的な概念「中華民族」に収斂させるという本来の目的だけでなく、さらに香港、台湾を含む中国大陸外の華人社会に対する「中華民族アイデンティティ」による包摂の正当性・合理性を説明する論拠としてよく用いられる[上野, 2012: 263-264; Shih, 2010: 30-33]。即ち、これは華人信者が持つ重層的なアイデンティティの中で、「中華」との同質的な部分を強調することで、「中華」をコアとするモデルに編入させるためである。それはまさに「散種」としてのディアスポラのひとつのヴァリエーションと見ることができる。

同じような状況は、華人研究の共通した特徴として、文学研究にも存在する。蕭[2009: 28-33]によれば、1980年代以来、世界各地で中国語/華語<sup>2</sup>で創作される現代文学をまとめるため、「海外華文文学」というカテゴリーが創られた。これらの文学も華人の移動および中国語/華語の拡散による結果として認識され、「中国文学」を自明なコアとしたうえで、その延長または支流として定義されている(図3)。それに対して、Shih[2010]によれば、このようなディアスポラの構造を前提とする研究では、華人および彼らの言語と文化がローカル社会と交渉する間、「中国的要素」ではない異質性を取り入れつつ、変化していく事実が無視されがちであるとする。この状況を反省するため、Shihは「マイナー文学」の概念を援用し、華人はたとえ中国と同じ言語を使うとしても、それはメジャー言語のマイナーな使い方であるという興味深い視点を提示した。そのうえで、Shihは「中華」に対する異質性を基準として、そのような経験を有する文学をまとめて「華語圏文学 (Sinophone Literature)」と呼ぶことを提案した(図4)。

Shihの議論は文学のみならず、移民研究、地域研究、トランスナショナリズム、ポストコロニアル批判など複数の領域を横断しているが、その研究の対象はまだ文学を中心とする文芸関連の域を出ていない。特に「華語圏文学」は「中華」に対する異質性、すなわち「中華」を他者化する見方を定義の基準としているが、様々な異質性の相互間連結について議論されていないという点においては、まだ構想の段階にとどまっている。

しかし、本稿の冒頭部分を振り返ってみれば、華人社会の宗教研究とりわけプロテスタントに対する研究において、

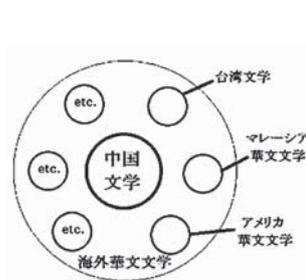


図 3

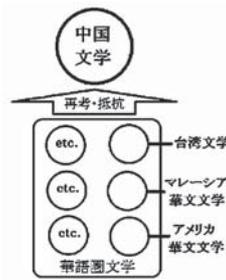


図 4

ディアスポラという視点を再考・反省するためには「華語圏文学」の発想を援用できると考えられる。プロテスタントが中国に伝来した1807年から約200年間、大まかに中国共産党政権が成立する1949年を境にできる。それまでの中国教会は西洋人宣教師の指導または強い影響のもとにあった。そして1920年代に起きた土着化運動も戦乱の中で継続しなかった。それ以降は中国共産党の方針の下で、今日に至るまで厳しく管制され、その意味では依然主流社会からは外来宗教として認識されているということができよう。

即ち、華人が中国以外の様々な社会で生きながら、それぞれの日常生活を通じて、「中華」と異なる何らかのローカリティを取り入れている。それと同じように、華人信者もプロテスタントの信仰を受容したため、「中華」の文脈に存在しない経験を身に付けるようになる。たとえプロテスタントは華人信者が生きるホスト社会において主流的な存在でなくても、聖書の勉強、祈ること、儀礼への参加など様々な宗教実践は、日常生活が内包したローカリティと同じく、「中華」に対しては異質性を有する。そのため、本稿では華人プロテスタント信者の宗教的経験と実践という異質的な要素に注目し、それを通じた連結を考察することにより、ディアスポラの構造を前提とする華人研究への反省を試みる。次の章では、華人社会のプロテスタント事情を概観してから、具体的な研究対象について説明する。

## I 華人社会のプロテスタント事情

「中華」に対して異質性を有する、宗教実践を通じた連結を考察するには、華人信者たちと中国との関係、および信者同士の連結を構築する仕方を確認する必要がある。本章ではこの2点について概観する。

華人信者の世界は、おおよそ1949年ごろから、独自の文脈形成を始めた。西欧人宣教師らにとって、それまでの華人社会は中国本土の社会が海外に伸長したものに過ぎないとみなされていた〔蘇 2010 : 31〕。中国人信者移民のコミュニティが東南アジア各地に点在するようになったが、当時、その数は非常に少なかった〔梁 2004 : 78〕。しかし、中国共産党政権が成立すると、信者だけでなく、教会の資源も中国大陸から海外の華人社会に流出していった。さらに中国における西洋人宣教師の強制退去や「三自愛国教会」の設立といった政府の統制政策の下で、中国教会と海外との交流は減少していき、やがて様々な政治運動に伴い完全に途絶した。

一方、中国人信者や教会資源が海外に流出した経緯についての研究は少なく、その実態には不明瞭な点も残されているが、中国大陸の神学教育機関が大量に海外に移転されたり、ホスト社会で新設されることにより、中国語/華語による神学教育が華人社会の文脈に適合する形で展開してきた点は重要である〔蕭 2006 : 63-68, 73〕。華人信者たちは聖職者の養成を自前で行えるようになり、やがて1970年代以降、英米中心の福音主義運動とリンクしてプロテスタント世界において活潑な流れとして認識されてきた。1980年代以来、逆に中国国内の信者に対して聖書の密輸をはじめとする、様々な援助を提供し、信者人口の増長を促進させた。中国教会との力関係の逆転により、華人信者の世界はプロテスタントという軸において、間違いなく中国より上位に位置づけられている。

今日の華人社会において、プロテスタント人口は香港と台湾を含めて約200万人に上る。その分布は東南アジアと北米に集中するものの、世界中で89か国に広がっている。しかし実のところ、その世界的拡大即ち信者の再生産は、華人信者である個人の移住・移動や、特定の教派またはコミュニティの拡大というより、様々なミッション団体の働きかけを受けた非信者による改心の結果であったことが、数多く報告されてきた〔Fung, 1989 : 111-112 ; Hunter and Chan, 2009 : 821〕。ここでいう「ミッション団体 (organization / 福音機構)」とは、「教会 (church)」とは違う存在である。通常、「教会」とは、一定の地域をカバーして、固定的な場所で毎週の礼拝をはじめとする日常的な宗教実践を行うためのコミュニティである。「ミッション団体」の場合、狭い意味では宣教師を派遣する「伝道協会 (missionary society / 差会)」を指しているが、今日では「福音を述べ伝える」という主旨のもとで、日常的な宗教実践以外の様々な宗教的目的に特化した多様な団体や集まりにまで適用されており、神学校、ミッション系出版社、慈善団体などが含まれる場合もある。それらの活動も大抵、一般教会より越境的かつ多角的に展開している。

華人信者をめぐる研究では、このようなミッション団体について一部触れられているものの、それを取り上げて考察したものはない。Yang [2002] はヒューストン中国教会を事例に、海外とのトランスナショナルな繋がりを考察する際、当教会の信者個人または教会の運営層がそれぞれ、海外の個人またはミッション団体との間に、資金の

援助から伝道活動の参与、神学生の養成など様々な活動が行われていることを記述した。ただし、それらの描写はいずれもヒューストン中国教会側の視点に基づいている。

上記の内容からわかるように、華人信者の世界はプロテスタントの「異質性」によって「中華」と異なるだけでなく、プロテスタントという範疇の中でも中国大陆との区別が明らかである。なおその世界規模での展開には、毎週の礼拝など日常的な宗教実践を中心に取り組む教会や信者個人より、特定の方向または専門性の高い宗教活動に従事するミッション団体がトランスナショナルな展開をしているように見受けられる。そのため、次章から代表的なミッション団体を取り上げ、その活動の内容を中心に考察していく。

## Ⅱ 「中国信徒布道会」の創設<sup>3</sup>

華人社会で活動するミッション団体は大きく2種類に分かれる。一つは1949年以降、中国大陆から撤退した一部の西洋系ミッション団体が引き続き華人を対象に伝道している。1960年代から1970年代にかけて、それらの団体のほとんどは最初のビジョンまたは運営方針を維持したまま、運営の権限が西洋人宣教師から華人に譲渡されたものである。もう一つは1945年以降、中国人信者または華人信者が設立したミッション団体である。その間、1970年代初頭まで設立された団体は少ないが、先行者としてそれ以降の華人系ミッション団体に対して、関係者の異動からビジョンの共有まで様々な影響を与えている。本稿では、大多数の団体よりも強い影響力と長い歴史を持っている超教派ミッション団体「中国信徒布道会 (Chinese Christian Mission)」(以下：中信)を事例として取り上げた。2011年2月から2013年11月まで当団体の関係者に対してインタビュー調査、及び一部のイベントへの参与観察を行った。本稿はその結果に基づき、さらに定期出版物や記念文集など文献資料を加えて、その歴史と活動内容について調査した。

中信の創設者である王永信牧師は1925年、北京のあるプロテスタントの家庭で生まれた。1941年、1949年と二度大学に入学し、英語を専攻するが、いずれも戦乱によって学業を中断せざるを得ず、1950年に香港を経由して台湾に渡った。1953年、アメリカ合同メソジスト教会の宣教師である聶樹德牧師 (Rev. Dr. Edward K. Knettl) のもとで洗礼を受け、さらに同宗派の台湾開教事業の助手になって伝道者の生涯を始めた。1957年、彼は二人のスウェーデン人宣教師に同行してヨーロッパ巡回伝道に発った。同氏はスウェーデンのヨンショーピングに滞在していた間、神から声を掛けられて、華人世界に伝道すべきというビジョンを受けたと語っている。

伝道集会の間、私は一人で森に入って祈りながら、夕方の説教の準備をしていた。その時、ある声が私の心に話しかけてくれた。「あなたは自国の民のために熱心に仕えなさい」と。周囲を見てみても、誰もいない。・・・私は、これは神が与えてくれた感動だと思う。だから私は自国の民のため、華人のため、中国人のために熱心に仕えたいと思う。

### 『宣教生命傳承——王永信牧師50年事奉傳承』DVD 本人映像

1958年、彼はアメリカへ移住した。1960年にセントラル・バイブル大学の神学課程を修了した後、デトロイトに引越して中国系学生や若者を中心とする聖書勉強会など伝道活動に取り組みながら、自身のビジョンに賛同してくれる仲間を集めた。1961年10月には、「中国信徒布道会」の名義で伝道用雑誌『中国信徒月刊 (Chinese Christian Today)』(1980年より月刊『中信』に改名)を英語で編集し、台湾で組版をした後、自宅で印刷して一部の華人教会に配った。この素朴な伝道用雑誌は、各教会からの反響を呼び起こした。そこで中国語に切り替え、「福音伝華民、恩澤遍万邦 (福音が華人に伝えられ、恵みが万国に及ぶ)」というモットーを制定し、正式な伝道活動を開始した。印刷業務上の需要があった台北でオフィスを設立し、デトロイトにある本部との共同編集した原稿を台湾で印刷し世界中に送る仕組みをつくった。中信の活動は月刊『中信』を中心にしながら、伝道活動の拡大や華人信者の世界における自らのビジョンの浸透を目指し、世界各地で次々とオフィスを設立していった。

1976年、王永信牧師が退任した後、中信の2代目総幹事に鄭果牧師が就任した。鄭果牧師は1949年、戦乱の中に妻と子供たちを取り残したまま中国を離れた後、マニラにある教会「霊恵堂」の主任牧師になり、宣教師の派遣事

業を推進していった。彼の主導の下、中信はマニラとシンガポールでオフィスを設置したほか、1979年からは宣教師の派遣事業や、カウンセリング事業など、月刊『中信』以外の多様なミッション活動を展開するようになった。

1990年代半ば以降、中信はアメリカの本部が世界各地のオフィスを統率するという一極集中型から、各地のオフィスがそれぞれの裁量で各自独立的運営する形に切り替えた。1997年からは、多くの中信が「中信国際差会」という宣教師の派遣事業に関わる業務連携のための部署を設置し、多国籍企業グループのような形態で精力的に活動している。

表1 世界各地の中信の一覧

名称	創設の年	主要な活動	関連事項
アメリカ中信	1961	雑誌の編集、書籍の出版、宣教師の派遣、青少年育成、地域伝道	
台湾中信	1962	雑誌の編集、書籍の出版、宣教師の支援、青少年育成	「中信国際差会」に参加していない
香港中信	1965	雑誌の編集、書籍の出版、宣教師の派遣、地域伝道	
フィリピン中信	1970	宣教師の派遣、青少年育成	1990年代半ば以降活動停止に。
シンガポール中信	1977	雑誌の編集、書籍の出版、カウンセリング、青少年育成	1991年にマレーシアで事務所を開設。
カナダ中信	1981	書籍の出版、カウンセリング、地域伝道	
マカオ中信	1993	地域伝道	香港中信による設立。
オーストラリア中信	1993	雑誌の編集、宣教師の派遣、地域伝道	
タイ中信	1995	地域伝道	スタッフも活動も少ない。
コスタリカ中信	2001	地域伝道	アメリカ中信による設立。
ニュージーランド中信	2010	雑誌の編集、地域伝道、宣教師の支援	オーストラリア中信による設立。

### Ⅲ 伝道雑誌月刊『中信』

中信にとって、伝道雑誌月刊『中信』の刊行はその活動のスタートであり、様々な活動のコアでもある。今日では、東南アジアから北米まで、世界中の多くの華人信者のコミュニティ、とりわけ中国語/華語を使用する信者のコミュニティにおいて、この平均十数ページしかないA5サイズの小さな雑誌を目にすることがある。中国語/華語によるプロテスタント系の定期出版物のなかでも、21世紀初頭まで最大の発行部数を誇っていたためである。1990年代末からインターネット上でも閲覧できるようにもなり、聖書を除けば、華人信者の世界に最も広く浸透している出版物である。

表2 月刊『中信』の発行状況

バージョン	発行部数	担当する中信
国際版（簡体字／繁体字）	約14万部	香港・アメリカ
台湾版（繁体字）	約15万部	台湾
新馬版（簡体字）	約2万部	シンガポール

現在までの月刊『中信』には、3つのバージョンがある。第一のものは、台湾中信の『中信』である。1980年代まで、印刷のコストが安かったことや台湾から北米に移住する人が多かったことから、編集から印刷までの業務の大半を台湾中信が担っていた。第二に、シンガポール中信の『中信』である。同中信は、マレーシアやシンガポールの華人教会から「身近な社会の話題がほしい」という要望を受けて、1977年より「新馬<sup>4</sup>版」の月刊『中信』を発行するようになった。シンガポール中信は、簡体字正書法の普及を鑑みて、1992年から簡体字印刷に切り替えた。1990年代以降に中国を出国した留学生やニューカマーに対する伝道活動においては、「台湾版」より簡体字印刷の「新馬版」が多く使用されていた。第三に、アメリカ中信と香港中信のものである。中国大陸出身者の著しい増加や、「新馬版」の編集人材の不足等の諸原因により、アメリカ中信と香港中信は1998年から共同編集による「国際版」を簡体字と繁体字の両方で発行している。

複数のバージョンがあるとはいえ、編集の方針は基本的に同じである。いずれの月刊『中信』でも、読みやすさに加えて、伝道活動の道具として、キリスト者と非キリスト者との間で経験を共有できる契機を作ることが重視されている。そのため、どのバージョンにおいても内容の大半は「見證文章」即ち第一人称による信仰経験の語りである。それ以外は、主に読者からの質問への回答やキリスト信仰に関わる文芸作品の紹介で構成されている。

例えば、2014年3月号の「国際版」では、ある高齢の女性へのインタビューに基づいた「苦盡甘來（苦去りて、楽來たる）」という信仰経験が掲載されている。1925年に生まれたこの人は、夫とともに広東省の故郷を離れて香港に移住し、たくさんの子供を持ちながら、不安定な生活を続けていた。そして生命の危機に瀕した時に、キリスト信仰と接触した。子供たちから夫まで次々とキリスト者になり、日常生活の雰囲気も様態も少しずつ良くなった。やがて自身も伝統信仰を棄ててキリスト者になった。「肺腑之言（真心のこもった言葉）」という節題が当てられた結論部にはこう書いてある。

私の人生の前半は苦しみにあふれ、苦痛にあがいていました。だからいつも、不幸な人のために祈っています。どうかより多くの皆さんが、私のようにキリストの愛から幸せをもらえますように。私の5番目の子供、幼平は、主キリストを信じるようになる前、株で失敗して破産しました。妻からも離婚され、私は心から彼のために祈りました。後に彼は後悔の念とともに悔い改めました。聖書には次のようにあります。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」（第2コリント5：17）<sup>5</sup>。幼平の生命に変化が訪れました。離婚して4年経ったのに、前妻から再び理解を得られました。主の情けにより、ばらばらになった家庭がまた再び1つになりました。今は夫婦とも仲睦まじく、子供もよく言うことをききます。すべて神のおかげです。

主イエスは言いました。「あなたがたも、心配しないで、安心していなさい。こんなにも、念には念を入れて話してあげたのは、そのためなのですから。たしかに、この世では苦難と苦しみは山ほどあります。しかし、元気を出しなさい。私はすでに世に勝ったのです。（ヨハネによる福音書16：33）」

読者の皆様、人生で苦しいことがあるのは仕方がないことですが、主イエスの懐の元で平安に過ごされますことをお祈りいたします。

『中信』2014年3月号5-6頁

このように、個人の生活を紹介したうえで、キリスト信仰との接触、そして信仰を受け入れた経験を語り、最後に神への賛美と感謝に収斂する型が現在の中国語／華語による文書伝道の中では最も一般的である。そして例外なく聖書の内容を引用して具体的な事例と照合することで、キリスト信仰という価値観の実践を示すのである。こうして、大量の個人的経験を収集して伝播する月刊『中信』は、非キリスト者に対して「信仰の証し」として認識されるだけでなく、読者である信者に対しても他人の信仰経験を共有する機会を提供することになる。

また同月号にある「幸福的涙水（幸せの涙）」は、「中国大陸出身者向け」の文章である。作者の女性は結婚してから間もなく、夫の大学院進学とともに渡米したが、移住者・移動者の生活において様々な困難と不安に直面していた。前の文章と比べると、個人的背景の語りは簡略化されており、冒頭からこう書いてある。

出国する以前、私には自分の仕事や交友関係となじみのある生活環境がありました。国を出てからは、異国での生活の不便さ、家族という身分に対する制限、人生の方向性の再調整、及び新婚生活の様々な摩擦により、私はいつも焦り苛つき不安を感じるようになり、どうしていいかわかりませんでした。私のこのようなマイナスの感情を和らげる唯一の方法は、夫に話して聞いてもらうことでした。私は夫がわかってくれる、理解してくれる、親身になって同情してくれて、そしてもっと私を大事にしてくれるだろうと思っていました。しかし、その時の彼は、私と同様の気持ちを抱いていただけでなく、さらに仕事上で非常に大きなストレスを背負わなければならなかったのです。彼は私以上に、私による理解、思いやりと手助けを必要としていました。けれども新婚の私達は、それぞれ自分の辛さのみを考え、どちらも相手をもっとつくしてくれるよう期待していました。そのためすれ違いはどんどん大きくなり、言い争うこともますます増え、しょっちゅう夜中まで口論し、こんな結婚生活はもう続けたくないとさえ

思いました。

ひよんな機会から、私は一組のキリスト者の夫婦に出会い、彼らは私を華人教会に誘いました。教会に入ったとたん、私はキリスト者の夫婦たちに惹き付けられたのです。彼ら夫婦間の恩愛が羨ましく、彼らの表情にはいつも喜びと安らかさが満ちあふれていました。ある夫婦は、子供が間もなく大学に上がるというのに、二人の間のやり取りは、今でも恋愛期にあると感じさせるものでした。彼らに恩愛の秘訣を訊ねたところ、彼らの答えは「私たちの家ではイエス様がお決めになるから」というものでした。私はとても興味を持ち、またこのようにすばらしい婚姻にとっても憧れたので、毎回興味津々で教会の集いにそういう経験を学びに行ったのです。

『中信』2014年3月号2-3頁

Yang [1999] が収集した中国大陸出身のニューカマーの事例にも、家庭の経営と留学・移民との葛藤をめぐる語が多い。逆に言えば、トランスナショナルな華人社会という共通した背景のもとで、特に青年層を中心に、この種の話題が共有されやすい。伝道活動の対象者を把握しようとする中信のスタッフたちの努力ぶりも多少伺える。

一方、特定の地域の文脈に根差した話題を通じて、読者に親近感を与えるための努力もある。上記の「国際版」と同時に刊行された2014年4月号の「新馬版」では、このような記述がある。

一昨年の末、9年間も主のもとを離れた娘一家は、再び教会に戻って主を礼拝することになりました。私はとてもうれしいです。夫婦二人がともに熱心に主に仕えていますから、家族全員が祝福されています！私の息子まで変わりました。毎週メイドを連れて教会に通っています。メイドの国籍を考慮して、彼女が言葉を理解できる教会を選びました。誠に主に感謝します。私の子孫代々が主に奉仕することを幸せだと思えますように！これが私からの真摯な願いです。

以前娘婿は4Dの賭け事をととても好んでおり、車の中にまで「金運を招く」偶像を並べて、金運がよくなることを願っていました。よく当たることもあり、このことで彼はますます深く信じて疑わなくなりました。しかし、教会に戻って集ってからのというもの、彼のいのちは変わりました。彼はまた息子や娘がとりわけ利口に変わったのを見て、真の神が彼らの家庭に祝福をお与えていることを知ったのです。彼は偶像を捨てたのみならず、さらに父親の前で自分は既に賭け事をやめたことを表明しました。主が彼のいのちを新たにお造りになったことを心から感謝します。このことにより、周囲の人々を惹き付け、彼らが主のもとに向き合えるよう影響を与えられることを願っています。

『中信』（新馬版）2014年4月号6-7頁

「4D」とは、「Four Digits」の略称であり、主にマレーシアやシンガポールなどで流行している宝くじの一種である。この用語は、台湾などでも使用されている。4Dは自宅に外国人のメイドを雇用することとともに、いずれもこれらの社会では日常的なものだが、これら社会の出身者ではない人にとっては、決してなじみのあるものではない。複数の中信の関係者によれば、初期の「新馬版」の編集業務においては、台湾出身の編集者による影響が強く、取り入れられる話題も汎用性が高いものだった。しかし後のシンガポールの教育制度の英語化に伴い、現地社会から十分な華語能力を持つ後継者が見つからず、現在では編集長以外の編集者全員がマレーシア出身の華人である。そこで言語能力のレベルはともかく、「地元色」の強い編集傾向を形成したようである。先の語りにも組み込まれた4Dという素材は、この編集傾向を反映しているといえよう。

似たような状況は「台湾版」にもある。台湾では、戒厳令時代が終了した後、様々な社会問題への関心が増加し、議論も溢れてきた。そのため、1990年代以来、多くの伝道用雑誌でそのような話題を増加させたり、あるいは特定の領域に特化させたりしてきた。そのような動きに対し、月刊『中信』は、キリスト信仰に関する基本的な主張と情報を最も多くの人々に普及させるため、身近な出来事や社会問題の話題に言及するものの、最終的には信仰の主題に戻ってくるのである。ただし、具体的な編集方針は極めて柔軟な態度を取っている。例えば、2014年4月号の「台湾版」には、伝統的な調味料（醬料）と食の安全をテーマとする記述がある。作者は子供時代の思い出から調味料の話題を提起し、最後はこう書いてある。

台湾では、ここ数年食品の問題が人々を悩ませています。以前、生徒たちと食の安全について話し合ったとき、ある生徒が述べた「先生、私たちはまるで元素の周期表を全部呑み込んだみたいですね」という一言はとても印象深いものでした。これはやや誇張された表現ですが、笑って済ませることはできないでしょう。食の安全について、生徒たちがまず思い浮かべるのは、飲み物、パン、そして調味料であり、これらはみな、子供たちの好きなものです。そのため、話し終わった後しばらくは、やりきれない思いと怒りが入り混じった空気が流れました。

(中略) 調味料には塩分と糖分が多く含まれるので、健康のためには、やはり摂り過ぎに注意すべきでしょう。しかし、調味料を付けるという行為は、既に習慣もしくは文化となってしまうため、心のこもった、体に良い調味料が私たちのもとに届くよう、調味料製造業者の良心に期待するほかありません。聖書のテモテへの手紙一章五節：「この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出てくる愛を、目標としています。」神の子たちよ！私たちの作り出す製品を正しく、間違いのないものへと導く子らは、今の世の中において、光のように輝いています。

『中信』(台湾版) 2014年4月号 14-15頁

これらの文章の事例は宗教的体験からキリスト教的価値観の実践まで、作者も第一世代の移民から定住化した人まで様々であり、さらに主要な読者に合わせて複数の文脈から取材している。個々の信者が信仰を内面化してさらに実践に還元するという極めて個人的な経験が、より広い範囲で共有されることになる。

個人の信仰経験を直接的に語るにしろ、あるいは思考の方向性を軽く提示するだけにしろ、「キリスト信仰に触れる契機」を提供することが、月刊『中信』の目的である。読者にとって、月刊『中信』はキリスト信仰をめぐる情報流通の領域であることを意味している。一方、汎用性を重視する道具として使いやすいという点が、伝道活動の実践に踏み出させる契機ともなりうる。実際、地域や教派を問わず、一部の教会組織または信者個人から見れば、月刊『中信』の購読または寄稿は、通常の礼拝やグループ活動など教会内の日常と比べると、キリスト信仰に基づく、より普遍的な繋がりを実感させることになる。そのため、多くの牧師や一般信者が月刊『中信』を高く評価している。

例えば、「札幌国際キリスト教会」という約90人の教会内、約20人の中国語礼拝グループがある。毎月、香港から10部の国際版『中信』が届けられる。ある70代の女性によれば、それは自身にとって牧師の説教以外、個人の信仰心を深める最重要な手段である<sup>6</sup>。クアラルンプールのすぐ隣にある町で、1600人もいる「Klang Chinese Methodist Church」の40代男性の一人も、自身の信仰上の第一言語が華語であるため、『中信』を含む数種の伝道用雑誌を定期的に読むのは十数年間に渡る習慣だと述べた。彼はこうしてマレーシア国外の華人信者の事情に興味を持つようになり、のちに海外の教会との相互訪問活動に積極的に取り組んだことがある<sup>7</sup>。他方、『中信』を教会内の宗教実践または個人的伝道活動への補助手段として考える教会もある。東南アジア最大規模の教会建築を持つ、約2000人がいるジャカルタの「Indonesian Reformed Evangelical Church」では、毎週インドネシア語と華語の礼拝がそれぞれ2回行われ、華語礼拝の参加者に対して、週報とともに当月の『中信』(新馬版)も渡される。なおこの教会の創設者の唐崇榮牧師(Rev. Stephen Tong)は著名な大衆伝道者でもあり、世界各地で行う彼の伝道イベントにおいて、『中信』を補助用資料または記念品としてよく配布するという<sup>8</sup>。

このように、月刊『中信』は華人信者に対して様々なレベルにおいて提供され、トランスナショナルな連携と拡大を促進させている。一方、伝道用雑誌であるため、「信者」と「非信者」を強く区別する意識を反映させる文章を重視する編集方針がある。そのため、華人信者の世界に対して信仰の有無を基準とする他者意識の形成にも大きな意味をもつと考えることができる。

信仰をもたない者への他者意識は、新しい信者ほど一層強い。上記の国際版の二つの事例はこうした新しい信者による寄稿である。実際、新しい信者の個人経験の収集は、『中信』の最も重要な編集方針である。多くの場合、こうした収集の作業は月刊『中信』を定期購読する教会に依頼される。例えば、シンガポールにある「聖道基督教会」という約600人がいる教会では、そこで洗礼を受けた者に対して、スタッフは必ず洗礼に至るまでの経験を書いて『中信』に投稿するよう依頼される<sup>9</sup>。また、中信の台湾オフィスの責任者は、彼らと各教会との関係について、近年で

は定期献金だけでなく原稿の募集にも積極的に協力する教会が増えたと述べた<sup>10</sup>。一方、香港オフィスはさらに支援教会から若者を中心に記者と編集助手のボランティアを募集し、取材に基づく原稿作成にも注力している<sup>11</sup>。

いずれにせよ、月刊『中信』の編集・制作の過程およびそこから生み出される記事の内容は、中国語/華語を用いて非伝統宗教のキリスト信仰を語るフィールドとなり、トランスナショナルな繋がりを構築する契機としての役割を果たしていると言えよう。

#### IV 考察

本稿はディアスポラの構造を前提とする従来の華人研究への反省を試みるため、華人社会におけるプロテスタント信者たちの宗教実践という、「中華」と異なる経験に注目し、その異質性を通じた連結を考察した。ここでは冒頭に立ち戻り、ディアスポラ状態をめぐる認識を整理したい。

人々が中国を離れて再びどこかの社会で安定化するまでの放浪状態をディアスポラと呼ぶこと自体は間違いではない。しかし、散種という意味を含むディアスポラ状態はその名の通り、同質性の連結を通じて対象者を出自からの延長または支流に位置づけという機能を暗黙のうちに果たしてしまう。ところが現実には、すでに中国以外の社会で生きるようになった人は、日常の生活を通じて、ホスト社会から「中華」と異なるローカルな経験を取り入れつつあるため、自己認識や言語、文化なども絶えず変質していく。そのような対象者の「生」が内包する異質性を無視して、「中華」と同質性のみを強調する視点は、華人社会の「非伝統宗教」であるプロテスタントに応用されれば、自文化中心主義的な権力関係に閉じこめられる結論以外のものを導きえない。

一方、文学研究において同じ現状に直面する Shih は、「華語圏文学」という概念を提案し、「中華」に対する異質性に基づく連結関係を構想した。現段階では一種のアプローチとしては未完成だが、本稿はその発想を華人社会の宗教研究とりわけプロテスタントへの研究に援用した。

そこで、本稿は華人社会におけるプロテスタントの存在が中国および抽象的な「中華」に対して異質性を有することを明らかにしたうえで、様々な地域に分散している華人信者の間で連結の役割を担うミッション団体「中国信徒布道会」いわゆる中信を事例に取り上げた。中信は1949年以降のディアスポラの流れから誕生したが、現在は特に伝道雑誌月刊『中信』を中心に多国籍企業グループのようにマルチサイトッドに展開して複数の発行拠点をもって、様々なミッション活動に従事している。月刊『中信』は信者の宗教的体験の紹介を通じた文書伝道の媒体として、個人の経験を収集して伝播するという、「中華」に対する異質な内容を交流させる共通のフィールドの役割を果たしている。

文書伝道は、非信者という「他者」を発見して、自らの側に変換させることが目的である伝道活動の一種である。実際の効果とは関係なく、伝道活動を行うこと自体は中国語/華語を用いながらも、言語が伝える経験の内容において「中華」を他者化する見方を内包した。さらに、月刊『中信』を通じた華人信者間の繋がりの構築や、それを用いた伝道活動のことを考えれば、このようなミッション団体の伝道は、華人研究において「中華」に対する異質性を通じた連結という新たな視点を導入するという構想にとって、実証に耐える具体的な事例となる。

こうした検討をおこなったうえで、華人信者の相互間の連結のモデルを描くなら、本稿の冒頭で挙げた図1と図2とは違い、「華語圏文学」(図4)に限りなく近くなる。華人信者をそこに代入すれば、「中華」を他者化するというベクトルだけでなく、「華語圏文学」にとって未解決の異質性による連結の問題に対しても、新しい方向を提示しうる。「中華」ヘゲモニーからの離脱を試みる華人が個別の文脈に完全に融合・同化すること以外、どのようなアンチテーゼを生み出すのかについて、更なる実証的な研究の蓄積が必要である。華人プロテスタントの伝道活動を本論で示した方向で深めることによって、華人研究全体の方法論的更新に貢献することは十分考えられる。

#### 注

1 最初の宣教師ロバート・モリソンが中国に来た1807年から『南京条約』調印後の1843年まで、西洋人宣教師たちは入国制限のため、東南アジア各地で拠点を作り、現地の華人にも伝道していた。

- 2 東南アジアの華人社会では、「中国」が政治上の正式な名称になる以前から、「華語」という概念がある。それは広東語や客家語などローカル社会の諸言語と相対的に、中央政府の官僚たちが使用する標準語、即ち北京語をベースとする「マンダリン」および書面語のことを指す。この範疇は後に中華民国政府が定めた「国語」の基準とはほぼ一致する。今日の台湾を含めて、「中文」が有する、政治的な概念としての「中国」を内包するニュアンスを避けるため、「中文」と互換できる用語として使われている。英語では、両方ともに「Chinese Language」と翻訳される。しかし、現在の日本語では「中文」の訳語は「中国語」であり、なお表意文字である漢字で表現されるため、「華語」が有するニュアンスは表現できないと考えられる。本稿では、Shih の論述以外、「Chinese Language」に相当する箇所を「中国語/華語」と表記する。
- 3 中信の歴史および王永信牧師の経歴について、『願祢の國降臨願』および『美國中信 50 周年特刊』に基づき、筆者が整理した。
- 4 「シンガポールとマレーシア」の略称である。
- 5 本稿では、聖書箇所の日本語訳はすべて新日本聖書刊行協会の「聖書 新改訳 ©2003」より引用する。
- 6 2012 年 9 月 2 日、札幌での調査による。
- 7 2011 年 11 月 6 日、クランでの調査による。
- 8 2011 年 9 月 18 日と 2013 年 10 月 6 日、ジャカルタでの調査による。
- 9 2012 年 10 月 7 日、シンガポールでの調査による。
- 10 2013 年 3 月 1 日、台北での調査による。
- 11 2011 年 3 月 1 日、香港でのインタビューによる。

## 引用・参考文献

### 日本語

上野稔弘 (2012) 「中国の国家・民族論の系譜における中華民族多元一体構造論の位置づけについて」瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』253-266 頁 昭和堂。

### 中国語

梁元生 (2004) 『十字蓮花——基督教與中國歷史文化論集』香港：基督教中國宗教文化研究社。

方文 (2008) <叠合认同：多元一体的生命逻辑>《社会学研究》北京：北京大学。

朱峰 (2009) 『基督教与海外华人的文化适应——近代东南亚华人移民社区的个案研究』北京：中华书局。

蘇精 (2010) 『基督教與新加坡華人 1819-1846』新竹：國立清華大學出版社。

蕭克諧 (2006) 『中文神學教育簡史』香港：道聲出版社。

蕭安凱 (2009) 『小説中國・虛構華文・想像台灣——論王德威的文學敘事與史觀』台南：國立成功大學文學院修士論文。

### 英語

Constable, Nicole (1994) *Christian Souls and Chinese Spirits: A Hakka Community in Hong Kong*, Oakland: University of California Press.

Fung, Karl (1989) *The Dragon Pilgrims: A Historical Study of a Chinese-American Church*, Ada: Providence Press.

Hunter, Alan & Chan, Kim-kwong (2009) "Growth of the Chinese Church Since 1949" in Tiedemann, R. G. *Handbook of Christianity in China: 1800 to the Present*, Leiden: Brill Academic Pub, pp.810-823.

Leung, Philip Yuen-Sang (2002) "The Moses of China: Huang Nai-Shang and the Chinese Christian Commune in Sibiu" Leo Suryadinata ed., *Ethnic Chinese in Singapore and Malaysia: A Sialogue between Tradition and Modernity*, New York: Times Academic Press.

Shih, Shu-mei (2010) "Against Diaspora: The Sinophone as Places of Cultural Production" in Tsu, Jing and Wang, Dived Der-wei (eds.) *Global Chinese Literature: Critical Essays*, Leiden: Brill Academic Pub, pp.29-48.

Yang, Fenggang (1999) *Chinese Christians in America: Conversion, Assimilation, and Adhesive Identities*, University Park: Pennsylvania State University Press.

Yang, Fenggang (2002) "Chinese Christians Transnationalism: Diverse Network of a Houston Church" in Ebaugh, Helen Rose & Chafetz, Janet Saltzman *Religion Across Borders: Transnational Immigrant Networks*, Walnut Creek: AltaMira Press.

**中国語資料**

大使命中心（編）《願祿的國降臨願》

中國信徒佈道會（編）《美國中信 50 周年特刊》

香港中國信徒佈道會《中信》2014 年 3 月号

台灣中國信徒佈道會《中信》2014 年 4 月号

新馬中國信徒佈道會《中信》2014 年 4 月号

※本稿は 2012 年度及び 2013 年度の国立民族学博物館特別共同利用研究員受入期間中の研究成果の一部である。

## Chinese Overseas Christian Transnational Networks: A Case Study of the Chinese Christian Mission

MORI Kainei

Abstract:

This paper examines the non-traditional religion of Protestants in Chinese Overseas society in an attempt to criticize the essentialist premise known as the “diaspora” that Chinese Overseas research possesses by employing the approach from arguments in Sinophone Literature that object to the direction of Chinese Overseas research. In other words, this paper will examine the possibility of connection through heterogeneity toward China, the origin of Chinese Overseas, by focusing on the experience of those religious practices of Protestants in Chinese Overseas society that differ from “Chineseness.” To be specific, the parachurch organization of the Chinese Christian Mission established in 1961 will be discussed as a case study. The missionary activities that the organization carries out, mainly through written mission work, using the monthly mission magazine *Chinese Christian Mission*, had the role of providing a common field that enabled exchanges of belief-related experiences between Chinese Overseas worshippers that had been substantially segmented due to being in multiple societies. Such a perspective of connection through heterogeneity is believed to be able to contribute to a methodological upgrade of the entire field of Chinese Overseas research and not just research on the non-traditional religion of Chinese Overseas.

Keywords: Chinese Overseas, Protestantism, diaspora, parachurch organization, Sinophone Literature

### 華人プロテスタント信者の越境的連結 ——「中国信徒布道会」をめぐる一考察——

モリ・カイネイ

要旨：

本稿は従来の華人研究が有する「ディアスポラ状態」という本質主義的な前提への批判を試みるため、華人研究の方向性に異議を唱えた「華語圏文学」の議論からその発想を援用し、華人社会の非伝統宗教のプロテスタントを研究対象とする。即ち、華人社会のプロテスタント信者たちの宗教実践という、「中国的要素」と異なる経験に注目し、出自である「中華」に対する異質性を通じた連結の可能性を考察する。具体的には、1961年に設立された超教派ミッション団体「中国信徒布道会」を事例として取り上げる。当団体が行っている、伝道雑誌月刊『中信』を通じた文書伝道を中心とする伝道活動は、実質的に複数の社会に分断された華人信者の間に、信仰関連の経験の交流を可能にするための共通フィールドを提供する役割を担っている。このような「異質性」による連結という視点は、華人社会の非伝統宗教だけでなく、華人研究全体の方法論的更新にも貢献できると考えられる。